

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 Structural Barriers in the Mind: The Effect of Individuating Information on Combatting Systemic Inequality

氏 名 陳 佳玉

論 文 内 容 の 要 旨

近年、社会的な不平等や社会階層の分断といったさまざまな社会問題が深刻化している。これまでの研究では、社会的な不平等が犯罪率の増加や社会的信頼の低下を引き起こし、社会福祉にネガティブな影響を与えることが指摘されており、社会の持続的発展を実現するには、社会的な不平等を低減させることが不可欠である。本研究の目的は、社会的な不平等を是正するため、格差のある階層間の相互協力を強め、資源共有を促進する方略を検討することである。

従来の研究では、社会的な不平等をもたらす社会構造と社会制度の側面に焦点が当てられてきた。ここでは、同類原理 (homophily)、すなわち、人々が自身と同じ社会集団に所属する相手との社会関係を志向する傾向が、社会的な不平等を深刻化させる一因として指摘されている。このような同類原理に基づく社会的選好を克服することは、社会階層間の障壁を取り除くために重要である。さらに、先行研究によると、個人の社会的選好や行動パターンは、社会階層に根ざした構造的なシステムによって影響を受ける可能性がある。その一方で、多くの社会的資源を有する富裕層が非富裕層と社会的資源を共有することが、構造的な不平等を是正するためには効果的であろう。そこで論文では、富裕層の社会的選好と行動パターンを変容させることで社会構造的な不平等を是正する方略を検討した。具体的には、個人化された情報に注意を向けることが構造的な不平等の低減に与える影響を検討した。個人化された情報とは、個人の特性、過去の経験、および行動に関する情報であり、個人が属する社会的カテゴリー集団の情報とは独立したものである。

本論文は、以下の 5 章から構成される。

第1章では、社会的不平等に関する先行研究を概観し、社会的不平等が個人にどのような影響をもたらすか、また社会的不平等がどのように形成されるかについてレビューを行い、本研究の問題意識を明らかにした。先行研究では、個人の能力や努力を含む内在的要素と社会構造などの制度的要素が社会的不平等を生み出すことが指摘されている。また、構造的な不平等は、そのネガティブな側面にもかかわらず、日常生活では関心を持たれにくい。国外における先行研究では、個人化された情報の呈示が、黒人に対するステレオタイプを低減させ、構造的な人種差別を抑制することが示されている。本研究では、社会階層間における対人選択と資源交換に注目し、個人化された情報が富裕層の社会的選好と行動パターンの変容にどのような影響を与えるかに焦点を当てる。

第2章(研究1)では、個人化された情報が階層間の対人選択に与える影響を検討するために、クラウドソーシングサービスを用いて、日本人参加者を対象としたシナリオ実験を実施した。具体的には、企業の人事採用において、参加者が2次選考を担当するというカバーストーリーのもと、候補者の地位(職歴あるいは出身大学)と協調性(個人化された情報)に関する情報を操作した上で、参加者に候補者1名のプロフィールを呈示した。プロフィールを読んだ後、参加者は候補者への評価を行った。分析の結果、協調性の主効果のみが有意であり、参加者は相互独立的な候補者よりも相互協調的な候補者を採用したいという評価を行いやすく、協調性の高い新規参入者は、その社会的地位にかかわらず、独立性の高い新規参入者よりも受容されやすい傾向が示された。このことは、日本社会で組織への新規参入者を受容する際、個人化された情報が重視される可能性を示唆する。ただし、本研究の参加者はクラウドソーシングサービスのワーカーであり、社会的に望ましいとされる意思決定に動機づけられていた可能性、および現実の組織における採用プロセスとは異なる点も議論された。

第3章(研究2)では、経済ゲーム実験を用いた繰り返しの社会的ジレンマ課題を通じて、個人化された情報処理プロセスが社会階層間の協力行動に及ぼす影響を解明した。日本(クラウドソーシングサービス)と中国(大学生サンプル)におけるオンライン実験で、実験参加者は富裕層に割り当てられ、30回の繰り返しの試行では、パートナー選択、および資源分配という2段階の意思決定がそれぞれ行われた。ここでは、協力的に行動する非富裕層のメンバーと利己的に行動する富裕層のメンバーどちらかを選択するかというジレンマ状況における、個人の対人選択の選好を検討した。その結果、日本と中国いずれの実験においても、非富裕層の人々が協力的に振る舞う場合は、階層間の協力行動が生じることが示された。この結果は、集団間の協力率に明確な差異がある場合、人々がカテゴリー集団間の格差(富裕層 vs. 非富裕層)にこだわらず、個人化された情報である協力率に注目し、非富裕層から真の「協力者」を見出して、社会階層の固定化の解消をもたらす可能性を示唆する。

第4章(研究3)では、富裕層と非富裕層との間の資源交換を促進するための介入

策を検討した。具体的には、課題を行う前に、ペアの相手に少額の資源を提供することが、資源交換を促進するかどうかを検討した。クラウドソーシングサービスを用いて、日本人を対象に、オンラインの行動実験を実施した。実験参加者は富裕層の一員として割り当てられ、20回の繰り返しの社会的ジレンマ課題において、(1) パートナー選択→(2) 少額資源の提供→(3) 資源分配という3段階の意思決定を行った。分析の結果、事前に少額資源を提供した参加者は、後続の社会的ジレンマ課題においてより多くの資源を協力的な非富裕層の成員に提供しようとする傾向が示された。

第5章では、3つの研究から得られた知見をまとめ、本論文の意義と今後の展望について論じた。本論文では、(1) 対人選択場面で、個人はカテゴリー情報よりも個人化された情報を優先する傾向があること、(2) 社会階層間の資源交換において、協力的に振る舞う非富裕層の成員は、利己的な富裕層の成員よりも好まれる傾向があること、および(3) 報酬をベースとした介入を資源交換のシステムに導入することで、階層間のポジティブな相互作用が促されることが示された。本研究の意義は二つ挙げられる。まず、階層的な社会システムにおいて、社会的カテゴリーによって定義される集団の境界を乗り越える、利他主義的同類性 (altruism homophily) の存在が示唆された。第二に、利他主義的同類性に基づく階層間での社会移動の可能性が示唆された。これらの知見に基づいて、社会的カテゴリー集団のみならず、個人化された情報をベースとした多様な評価基準を含む評判システムを構築することで、構造的な不平等を是正する可能性について議論した。その一方で、本研究は、富裕層の成員の社会的選好と行動パターンに焦点を当てており、非富裕層の成員については未検討である。また、本研究は、東アジアの文化的背景に基づいて実施され、参加者は仮想的な状況で意思決定を行っていた。今後は、より多様なサンプルを対象に、生態学的妥当性の高いアプローチを用いて、本研究で得られた知見をより詳細に検討する必要がある。